

第2回 沼津市総合教育会議 議事録

- 開催日時 平成27年7月28日（火曜日）14時00分～15時20分
- 開催場所 沼津市役所 3階 第2・3委員会室
- 出席者 市長 栗原 裕康
教育委員長 久松 但
委員長職務代理者 細沼 早希子
教育委員 三好 勝晴
教育委員 土屋 葉子
教育長 工藤 達朗
- 協議・調整事項
 - (1) 教育に関する大綱の策定について
 - (2) その他

【内容】

1 開会

2 市長挨拶

本日はお忙しい中、教育委員の皆様方にはご出席をいただき、ありがとうございます。本日は、主に「教育に関する大綱」について協議・調整を行います。大綱の策定については、「地方教育行政の組織及び運営に関する法律の一部を改正する法律」において、総合教育会議で協議・調整を行うことになっております。

一方、本市においては、平成21年に「教育基本構想」が策定され、本年3月には「改訂版」が策定されておりますが、「教育に関する大綱」は首長が定めることになっておりますので、本日、資料として、お示しをさせていただきました。私が目指す市の「まちづくり」のビジョン・方向性を加味しながら、自ら作成したものでございます。

皆様方からの様々なご指摘を賜りますようお願いいたしまして、挨拶に代えさせていただきます。

3 協議・調整事項

(1) 教育に関する大綱の策定について

大綱の文章を政策企画課長が朗読した後、市長が説明。

(市長)

<基本的な方向性>

日頃、市民の方々から市政についてご意見をいただく中で、市長としてどのようなまちにしたいのかということについて聞かれることが多い。一言で答えるのは難しいので、逆に、どのようなまちにしたいのか尋ねると、昔の沼津は良かったと、本市の都市的な魅力について答える方が多い。20～30年前と比較すると、徐々に総体的な都市的魅力が低下しているように感じる。まちなかに、昔のように人が集まるということが難しい一方で、地理的にも都市的な取組を發揮しやすい土地柄なので、そういった魅力に磨きをかけていきたいと考えている。

田舎的な良さということについて、本市は、海・山・川と自然環境に恵まれ、特に沼津港は、日頃から多くの来客により賑わっている。近年は外国人の方が多く、そこを取り込むことも必要だと思う。

また、地元就職先がないという理由で、市を離れる人も多いが、地元の経営者からは、望んでいる人材がないという意見も聞いている。そこに、雇用のミスマッチが生じている。一番は英語力だと思うので、その部分をどうやって実現していくかということについて、基本的な方策に記載した。

<基本的な方策>

はじめに、豊かな自然とは、裏を返せば、時に危険性を含んでおり、近年で言えば、火山活動が活発化している箱根や、3.11の津波は最たるものだと思う。学校教育だけでなく、社会教育全体で、高い防災意識を持つことが重要である。自分の命を守ることを身に付けていかなければならないと考えている。

2つ目の洗練されたマナーについて、最近、東京で行われた結婚式に出席する機会が2度あり、その時に感じたことだが、披露宴のプログラム中、出席者がスピーチを聞く姿勢が非常に良く、それまで歓談をしても、スピーチが始まると静かに聞いている。それが、都会と田舎の違いということであれば、都会的な良さを生かすという面においても、最低限のマナーは身に付けるようにしたい。

3つ目に、本市では、学校で言語教育を行っており、英語力が高くなっていると思う反面、見直しが必要な部分もあると考えている。企業が求めている人材として、英語力が挙げられるので、自分も含め、もう少し英語を話せるような教育が必要だと思う。

4つ目に、本市の子どもは、地域に密着していて大変良いが、転勤等の多い現代においては、沼津だけではなく、住むところ、そこでの人と人とのつながりを大事にするということが必要だと感じている。

説明は以上だが、当然、足りないところやおかしいところもあると思うので、忌憚のないご意見をいただきたい。

(委員)

国際感覚は大事だが、その前に子どもたちが自分の住んでいるまち「沼津」を好

きになることも重要である。自分のアイデンティティを醸成し、社会人になった時に外に向かって「沼津は良いところ」と言える、そういう人を育てる必要があり、それが始まりと思う。そのような思いが大綱に盛り込められないか。

また、教育の原点は家庭にあると感じる。それを共通認識としてはどうか。

(委員)

基本的な方向性が3段落に分かれているが、上の2段落は、まちづくりとしては良いと思うが、教育に関する大綱という意味で記載するのは、少し難しい気がしている。本市の地理的な特性や特徴を教育にどう結びつけるのか。

(委員)

基本的な方向性の内容は、教育基本構想と一致しており、問題ないと思う。

(教育長)

この原案は、市長自らが教育基本構想を熟読して作成したもので、今後の本市の教育の方向性として、大きな視点で捉えている。市民の方からもわかりやすい内容になっていると思う。あれもこれも記載する必要はないと思う。

(委員)

『田舎の良さと都会的な良さ』の両面を生かすというのが、分かりにくい表現である。「両面を生かす」という言葉を変えてはどうか。

(市長)

「田舎の良さと都会的な良さ」と聞いてイメージするものは、人によって異なるかもしれないが、それぞれが両立するものだと思っている。

人格形成にあたり、風土・気候は大きな影響を与える。沼津を愛することが大事だということはそのとおりだと思うが、沼津を愛されるような場所にしなければならないと思っている。そういう意味では、教員が子どもに押し付けるような教育はしたくはないと考えている。

(委員)

子どもたちは、沼津のことをあまり知らないまま大学へ行き、そこで各地から集まって来た人と出会って話をしても沼津の良さが答えられない。アイデンティティの確立という意味では、胸を張って沼津について語れる学生時代を過ごすことが重要だと思う。沼津という郷土を好きになる基盤を創ってほしい。

(市長)

本市では、「総合的な学習の時間」や「がんばる学校応援事業」など様々な特色を持たせた教育を実施しているが、高校生活は大学受験のために、その大半が費やされる。一方、「しゃべり場」に参加する者、部活動中心に頑張る者様々である。

大綱は、教育全般にわたるものだが、本市の魅力という面において、「ぬまづの宝100選」を選定し、良いところを知っていただくよう様々な場面で発信してきたが、昨年、市民にアンケートをとったところ、その存在自体を知らないと答えた方が40%以上いるという結果が出た。いかに市民の皆様の関心を得るか考えている

ところである。

(委員)

基本的な方策の4つ目の「地域における人と人とのつながりを大切にし」というところで、本市で小中高と教育を受けた子が、良い教育を受けたと思い、大人になった時に戻って来て自分の子に同じ教育を受けさせたいと思ってほしい。「沼津の魅力をもっと感じられる教育」、「郷土愛のもてる教育」を入れていただきたい。

また、『住んだところ』『住んでいるところ』『住むであろうところ』の部分に沼津という言葉が入らないだろうか。沼津はつまらないまちだと大人が言わないような教育が必要だと思う。

(委員)

東日本大震災後、防災教育が重視され、それは非常に重要なことだと思うが、災害における「命を大切にする心」では意味が狭まってしまう。「命を大切にする心」は災害でもそうだが、いじめなどでも言われている。「命を大切にする心」は災害以外の場面でも使われるので範囲を広げてはどうか。

また、地球環境や自然環境を他人ごとではなく、自らの問題として理解する心を盛り込めればと思う。

(市長)

ご指摘のとおり環境という視点が欠けていたので検討したいと思う。

(委員)

基本的な方策の順番には優先順位があるのか。

(教育長)

並列であり、順位はない。

(委員)

洗練されたマナーという表現を変えてみてはどうか。「洗練されたマナー」と聞くと、気取って使うようなイメージを持たせる気がするので、別の表現があればいいと思う。

(委員)

「芸術文化及びスポーツに親しみ」の文と「洗練されたマナー」が繋がってこない。「芸術文化及びスポーツに親しみ」であれば、「豊かな人間性を育む教育」などが合うのではないか。

また、3つ目の文章について、グローバル化する社会で、英語力は必要だと思うが、今の子どもたちには、日本語でコミュニケーションを取るといった能力も欠けていて、人と人とが直接向き合ってお互いに意思を表現するという能力が低いことが問題となっている。英語力だけではなく、その辺りも押さえておきたい。

(教育長)

本市では言語教育を行っており、英語と読解、まさにコミュニケーションに必要な能力を育成することを目指している。この文章からはその部分が読み取れると

考えている。

(市長)

例えば、子どもたちは、おじぎをするのが下手だが、これは最低限のマナーだと思う。人間が気持ちを表す形というものも大切にしなければならない。「洗練されたマナー」という表現以外に、もっと良い表現があったら知恵を貸していただきたい。

作法を知らない者を田舎者と表現することがあるが、つまらない偏見を持たれないようにしたい。

(委員)

大綱の周知方法について、広報等に掲載するのか。

(市長)

今後、検討していく。個人的には、市民に押し付けるイメージを与えるものにはしたくないと考えている。

(2) その他について

(委員)

先日、学校訪問をして感じたことだが、学校には様々な子どもがいて、その中で教員を補助する「いきいき学校生活応援スタッフ」などの人数が圧倒的に足りていない。このため、子どもたちが落ち着いて勉強ができない環境が生じている。

これには、市の財政が絡み、教育は予算をつけてもすぐに効果が目に見えるものではないので、難しい面もあるとは思いますが、子どものアイデンティティの醸成にもつながる話なので、是非検討していただきたいと思う。

人口流出の直接の歯止めにはならないかもしれないが、教育環境の充実ということが選択肢の一つになることもある。

(委員)

他市町の状況と比較をすると、本市は、いきいきスタッフの数が少ない。実際に勤務しているスタッフも人が足りないとっており、時間が来たからと言って帰ることができず、サービスで働いている姿も見かけた。そのような現状を市長にも知っていただきたい。

(市長)

現場の方の話を聞くと、多忙の原因は、モンスターペアレントのようなクレーマー対応など様々であるが、学校側に教員のアシストとなるような外部の人間を拒む傾向があるとも聞いたことがある。

(教育長)

通常学級に在席する子どもの中で、特別な支援が必要とされる子どもは、全体の6%くらいいると言われており、各クラス1～2人くらいの計算になる。そのような状況で、教員の補助をするいきいきスタッフは、市全体で30名いるが、どうし

でも足りない部分があり、厚い支援が必要と感じている。

(市長)

教育に多くの予算をかければもちろん良くなると思っているが、なかなかそればかりできない状況である。市内の学校の施設設備も老朽化による改修が必要で、全体の予算の中で、今後対応しなければならない。

(委員)

静浦小中一貫学校が開校して1年が経過したが、様々な効果があったと思う。また、今朝の新聞では、磐田市が今後30年をかけて、小中一貫教育を推進していくという記事があった。これについての市長の意見はあるか。

(市長)

小中一貫教育は文科省の方針でもある。今までは、複式学級を避けるための方法という面があったが、学校の仕組み自体小中一貫の方が良いのではないかという見方が出てきた。本市では、まだ1年が経過したところなので、蓄積をして、市としての方向性を検討していきたい。

4 閉会